銅　賞

# 同じであるということ

横須賀市立田浦中学校三年　　近　藤　颯　葵

私は、小学生の頃、学童保育に通っていました。その学童保育がある建て物の中には、保育園、高齢者施設、そして障害者施設があります。なので、屋内ですれ違ったり、同じ園庭で遊んだりすることもありました。

しかし、当時の私には人の見方に違いがありました。保育園の子ども達や高齢の方々を見ると、「自分もあんなだったのか」や「きっとこんな風になるんだ」と、自分におきかえていました。それに比べ、障害を持った方々を見ると、「歩き方がおかしい」や「話し方が変」といったような、「おかしな人」という見方しかできていませんでした。

ところが、テレビのチャリティードラマの中で俳優が障害者を演じているのを見ると、「かわいそう」や「大変だなぁ」という思いになります。

なぜ、実際に障害を持った方々を見ると、「おかしな人」という見

方しかできないのか。そして、それは気にしなくてよい、自然であたり前のことなのか。

気になった私は、中学三年生の総合的な学習の一環であった福祉体験で、ある障害者施設へ行きました。その施設は、小学生の頃に通っていた学童保育のある施設とは違い、障害を持った方々のみが利用しています。重度と軽度な障害を持った方々で分かれており、私は軽度な障害を持った方々と福祉体験をしました。

事前訪問のときに、施設内を見学させてもらいました。その時、積極的に挨拶しようと思っていた私よりも先に、利用者の方々が挨拶をして下さり、「とても明るい方々だ。」と感じたことを覚えています。障害者の方自身、自分からコミュニケーションをとろうとしてくれていることが分かりました。

体験内容は、障害者の方々をサポートすることかと思っていましたが、実際は、一緒にすることでした。例えば、部屋の掃除です。サッとやってすぐ終わりかと思っていましたが、その逆でした。隅々まで丁寧にやるよう優しく教えて下さり、私がサポートされているようでした。休み時間も話しかけて下さり、私も何の違和感もなく、話すことができました。そんな休み時間にきこえたのは、帰宅後に

何をするかという話でした。ある人は、マックに行く、別の人は、スタバに行く、また別の人はユーチューブ見るという、私たちが普段することと同じことばかりでした。別の日は、好きな音楽アーティスト、グループについて話していて、私と同じグループや歌が好きな方がいて、楽しく話すことができました。

この体験から気づいたことは、私たちも障害を持った方々も「同じ人間である」ということです。人間という同じ生き物であることはあたり前ですが、「障害者」ときくと「おかしな人」とイメージすることは間違っていることだと思います。

福祉体験中に感じたものは、利用者の方々の明るさだけではなく、職員の方々の優しさも感じました。私に接するときと同じように、利用者の方々に接し、特別扱いなどという差別が全くありませんでした。

先のように、共通点があれば、楽しく話せます。なのに、「障害者だから」という理由で避けたり、無視したりして、差別することは、自分にとっても、楽しく話せるのに話さず、損していることだと思います。また、私たちにとって、避けられたり、無視されたりするのが嫌なことであるのと同じように、障害者の方々にとっても、決

して気分の良いことではないはずです。

障害を持った方が必ずしも、話し方が変、歩き方がおかしいという訳ではありません。それでも、車いすでの生活の方、目、耳などが不自由な方は、きっと私たちが想像する以上に多くいると思います。

必要なのは、その人数や障害の種類を知ることではなく、障害を持った方々の立場、思いを理解し、それを行動にうつすことだと思います。

私たちが、自分のできない部分を他に人に教えてもらい、支えてもらうように、私たちも、障害者の感じる不自由な部分を、支え、力になることが大切だと思います。

無視されて嫌な気分になる点も、好きなお店に行く点も、好きな歌がある点も、お互い支え合う点も、私たちと障害者の間に大きな差はなく、皆、同じ人間だと思います。このことを理解して、互いを認め合うことが誰かとコミュニケーションをとる上で重要になると思います。